
新しい世界へのいざない

彦星こかぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新しい世界へのいざない

【著者名】

NZマーク

NZ8529B

【作者名】

彦星こかぎ

【あらすじ】

受験に向けて勉強する主人公。と、そこへ……？ファンタジーでもなくホラーでもない、微妙なお話。

(1)

それは今日取り掛かった中でも、とりわけ難しい設問だった。

式全体に文字を与え、数列として扱うことで原始関数を求めるのだ、ということはわかるのだが、途中で必ず意味の分からぬ積分をしなくてはならない。そういう公式は確かに存在しなかつたから、どうにか式変形しなくてはならないのだが、分数を有理化しても式を置き換えるても上手くいかない。数学的帰納法や相加相乗平均が使える隙もない。

頭にくる。しかし、これを解かないと次に進めない。

全く新しい考えが浮かばず、稚拙な絵ばかりがノートの端に並んでいた。

そのとき。

ふと後ろを振り返ると、スタンドミラーの中に、若い男が一人立っていた。

「……え？」

私は平然と、そう聞いた。出てきた声が、後ろに家族がいたときと全く変わらない口調であつたことに、自分で驚いた。

ちょうど勉強机の背後に立ててあるスタンドミラーは、今日のところは部屋を映す気がないらしい。大半は大写しになつた彼の全身で埋められていて、その背後にはただ薄青い波紋が揺れているだけだ。

彼には体型的な特徴がなく、背も高くはない。深い紺色の髪はあちこち、重力を無視した方向にはねていて、水色の瞳の上にもいくら

か被さつている。服はとにかく白。上着は丈が長く、ブーツの先は丸い。ベルトのバックルには、田が痛くなるほど複雑な模様が浮き彫りにされている。

「初めまして」

小さくお辞儀した白い男の声はどこまでも爽やかで、力強く、優しい。

聞いたことがないようで、あるような声だ。

「貴方は、我らの神が選んだ救世主。どうか私と共に、我らの国にいらしてください。我らは貴方を、姫君として迎えたい」

私はゆっくり呼吸して、それからこう答えた。

「どうして……どうして今頃になつて現れるの！？」

白い男がたじろいでいる間に、私は再び息を吸った。

「……確かに私は、ずっとそんな誘いを待つてた。自分は選ばれて、特別で、普通じゃないことをするために生まれたんだって思つてたよ。でも……」

やつと最近、やりたいを見つけたのに。

勉強も悪くないって、思い始めたのに。

魔法使いになるより面白そうな仕事を見つけたのに。
どうして……今になつて。

(2)

白い男は少々面食らつたようだが、小さく息をついた。

「それは……もちろん、すぐに了承していただけたとは思つていませんでした。ですが、……我らは貴方を必要としています。こちらに来ていただきたいのです」

私には、彼らの世界へ行くのがどういう感触なのか、簡単に想像できる。鏡は今、まるで垂直な水面のようになつていてるだろ。指で触れれば、ガラスの表面は波紋を起こし、吸い込むように指を、指につながる私を、その内部へと引っ張つていくだろ。水中……しかし厚さはせいぜい二センチだ……のようなガラスを抜ければ、新しい空気が広がつていてる。薄青い波紋が揺れる、とろりとしたあいまいな世界。おそらく重力はほとんどない。そして白い男は私の手をとり、彼の国に私をいざなつ……

私はそれを知つていてる。

そのとき。

ふと左を見ると、ベランダに羽の生えた女が立つていた。

「…………え？」

「誰ですか？」

私は聞いた。白い男も聞いた。

羽の女は心配そうな顔つきで、ベランダへ通じるガラス窓を軽くノックした。白い羽は……あえて言つと蝶のそれに似ているが、もつとシンプルで、もつと光り輝いている。

「ああ、もう……ずっと探してたのよ。その顔じゃ、全部忘れてしまったのね？」

「全部、って？」

「貴方はほんの十七年前まで、穢れなき神聖なる一族にいたのよ。私は貴方のこと、とても大切にしてた……貴方はこの穢れた世界で迷子になつたの。ずっと探したんだけど……」こんなおぞましい生き物の体に取り込まれていたなんて。でも早く見つかってよかつたわ。今すぐ戻つていらっしゃい」

羽の女は、しなやかに揺れる長い髪全体で不安を表した。羽衣、と呼ぶにふさわしい薄青色のひらひらした衣服は、非常口常性という点では白い男といい勝負だ。

「……どうすればいいの？」

誰ともなしに聞いた。

「お好きなよう」

白い男は平然と答えた。

「……来てほしい？」

「もちろんです」

「『来る』じゃないわ、一緒に帰るのよ」

羽の女に従つてベランダに出たひづなるのかも、私には簡単に想像できる。彼女が一言一言、秘密の言葉を唱えた瞬間、私は光に包まれるだらう。光の繭の中にすっかり封じられて、私のおぞましい体は壊れてなくなつてしまつだらう。そうすると私には元の姿が戻り、輝く羽が再び背中に生え揃う。羽衣を身につけて繭を出た私を、羽の女は優しく抱きしめ、そして至上の神聖なる世界に戻るべく、ベランダを飛び立つていく。

飛び立つ。遠くへ。遠くへ。遠くへ。

私はそれを知つてゐる。

(3)

「…………めんなさい。私は行けない」

私は……

白い男はうなずく。

「それも、覚悟していました」

羽の女は首をかしげる。

「そう…………まあ、体の寿命が終わるまで待ってあげてもいいんだけどね」

そして羽の女は白い男を促して、一人の一致した意見を口にさせる。

「しかし貴方は…………私がここを去った後、決して後悔しませんか?」

「…………わからない、けれど」

彼が彼女についていった後、後悔しない自信もない。

白い男は彼の国に私を連れて行くだろう。

彼の国は。彼らの国は。…………どんな国だろう?

姫となる、私は? 私はどうだというのだ。

姫と…………なつた、その後の私は。

羽の女は私を導いて遠くへ飛んでいくだろう。

遠くへ…………どこまで?

穢れなき神聖な場所まで。

そこに…………降り立つたら、その後は?

「確かに私は、貴方たちを望んでいた。不思議なことが起きて、こじやない場所へ行きたい、って思つてた。だけど…………そうして、

その後どうするべきかわからない。その後、何をすればいいのかわからない。でも今の私には、今まま暮らせば、やりたい事がある。それも漠然としてるし、うまくいく自信もないけど……でも、これから何をすべきか、わかるの

彼らを望んでいたのは、もう少し昔の話だ。中学時代とか……あの頃はまだ現実にも先の見通しなんてついていなかつたから、その日生活して勉強して休息するのに精一杯だつたから、全く新しい場所への招待をあつさり受け入れられたのだ。

その頃ならば私は、喜んで白い男についていつただろう。羽の女に抱き締められる事を嬉しく思つただろう。先のことなんかまるで考えずに、新しい世界からの誘いに容易く感じただろう。

……あの頃は、毎日が辛かつたから。

苦しいだけの日常から、一刻も早く抜け出したいと思つていたから。

「私はもう、知つているんだ」

白い男の事も、羽の女の事も、ずっと昔から知つていた。

「あんたたちも、みんな幻想だつて」

そして、白い男と羽の女は一瞬で消えた。

どちらも、随分前にしばしば考へた想像の登場人物だつた。私もあくまでも忠実な、異国の美青年。常に安心を与えてくれる、異世界の女性。私を迎えて来るその瞬間だけをエンドレスで流し続けるアニメーション……そんな愚かしいお話の登場人物たち。

幻想は、もう……いらぬ。

あの頃は、自分が夢見る力を失うことを本当に恐れていた。これが幻想だと認めてしまう大人になるのが嫌だつた。それは今でもそうだ……そして私は間違いなく、想像することをやめない。直接それを形に出来なくても、いつか何かを作るときに、それが役立つと

も信じている。

けれども、心から実現してほしいと願つての幻想は……むづい。
いい加減、区別しなければならない。

それは自分をほんの少し、後ろ向きに楽ししませるだけで、何の役にも立たないので。

誰かを喜ばせることも出来ない、自分を高める役にも立たない、
ガラクタの幻想たち。

……それらには、そろそろ別れを告げなければならぬ。

そのとき。

誰かが背後から私の腰に抱きついた。

「君は、とても悲しいことを言つんだね」

それは、言つてみれば……黒い男。

(4)

「貴方のこともしょっちゅう想像したね」

黒衣に身を包んだ、黒髪の青年。私を迎えて現れる異界人の一人

「そうだね。そして君が想像したなら、僕は本当に存在するんだよ」
彼に関しては、現れるのに窓も鏡も必要ない。常に、気付いたら私のすぐ傍にいる。

「これは、幻想、だよ……」

「幻想？ それじゃあ、僕が君を抱き締める感覺も……これは幻想かい？」

黒い男の腕は、強く私を締め付ける。波打つ黒衣が私の体をいくらか包み込む。足を撫でるベルベットの感触は妖しく、くすぐるようで貼りついてくる。

「君がどれだけ拒否しても、僕は決して消えたりしないよ」
そんな風に、私が想像したから。

「嫌……」

「あれ？ 君、ひょっとして怯えているのかい？ 君が作った僕に？」

黒い男はさも楽しそうに、私の顔を覗き込みながら笑う。

「それは嬉しいな……君は僕をそういう風に作ったものね。君が怖がってくれないと、物語は盛り上がらないもの」

私はもうすっかり彼に抱き上げられてしまっている。

私は幻想の一つとして黒い男を想像した……他と比べて異質だと
いう認識はなかった。けれど確かに彼は、無理強いして私を連れて
行く力を持つ唯一の存在だった。

「君は随分たくさん、僕の話を作ってくれたよね。それじゃ、實際にはどうしよう？ テレビ画面からがいいかい？ それとも、床か

壁に『穴』を作ろうか？

彼は、詩的に話すのが好きだった。狭い空間を通り抜けるのも。「どうやって君を閉じ込めてしまおう？ 小瓶に入れる？ それとも風船に閉じ込める？ でなきや、小さなお人形に変えてしまう？ 使い魔に食わせるのもいいね。悪鬼？ 蜘蛛？ 植物っていうのもあつたね」

全部、私が想像したのだ。
私がそうなるように。

毎日が苦しくて、苦しくて、でも何も出来なかつたから。耐えて耐えて、それも限界だつたから。何をする気も起こらなくて、何もしたくなくて、逃げたかつたから。

だから私は、想像することで逃げて隠れた。
だから私は、彼を作つた。

もう

消えてしまひたかつた から

けれど。

「……でも、嫌。本当に、行きたくない！」

もう私は気付いてしまつていてるのだ。

その種の幻想が一番、たちが悪い……連れて行かれる、という強烈な印象ばかりが強くて、その後に残るもののが全くない、救いようのない物語。

その中で私が快感を覚えるとするならば、それはその一瞬にしかない。誰かにさらわれていく、そして誰かの物になる、誰かに所有

されてしまうその瞬間。緩やかに自分の意志が消えて、物体になって、そして私を心から愛てくれる誰かのなすがままに、封じられる。

それは快感だ。間違いなく、私にとっては堪らないほど。確かにその想像はいつも、私を興奮で身震いさせた。白い男だって、羽の女だって、想像の根本にあるものは大して変わらない。抱き上げられ、拘束され、動けなくなつて、自分ではないものにせられる、それは確かに一種の快感だ。

でも、私はこの事も気付いてしまつてている。

その快樂は、結局一瞬でしかない。誰かに所有されたと感じた、その一瞬で終わってしまう。その後にはもう……全く何も残らない。「私は……、ものなんかじゃない！」

「嫌かい？」

黒い男は笑う。

「でも、そこで無理を通すのが僕の仕事なんだよね……ほら」

目の前の壁には、人がくぐれるほどの大黒く渦巻く穴が開いている。黒衣が流れる……吸い込まれている。

彼が私を放り投げれば……一瞬の陶酔と永遠の虚無、それで終わりだ。

「ね、一緒に行こうよ」

私が本気で叫ぼうとした、その一瞬で。

急に全てが消え去つた。

私は椅子の上に落ちた。ちょうど横向きに座れている。黒い男も、吸引力を持った穴も消えてしまつて、跡形もない。部屋の中に動く

ものではなく、聞こえるのは窓の向こうの喧騒だけだ。

いや……もう一つ。あまりに口常的で気付かなかつたけれど、稚拙すぎる電子音が机の上で鳴り響いていた。

……携帯電話。

反射的に開くと、他愛もない雑談のメールが届いていた。

「……そっ、か」

私には仲間がいる。

それが、あの頃と今との唯一の差。

メールに返信して、机に向き直つた。

……とりあえず今はまだ、解答集を見てもいい。次で、本番で、ちゃんと対応できればいい。

あの頃行きたくて堪らなかつた新しい世界は、決して今の場所と隔絶されているわけではなくて……だから、自分から足を進めなければならぬのだろう。

そしておそらくその先に、ござないはもう用意されている。

(4) (後書き)

彦星にかぎです。

読んでくださつてありがとうございました。

これは私の大学文芸部デビュー作品です。後半が拙い感じではあります……

これからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8529b/>

新しい世界へのいざない

2010年10月28日08時13分発行